

● シリーズ 私の見た日本 Vol.249

建築を通して見えてきた、日本の暮らしと文化

Baatarkhuu Uyanga (バートルフーウヤング)

モンゴル、ウランバートルに生まれ。2021年日本航空高等学校入学、2024年東京家政学院大学生生活デザイン学科入学。現在に至る。



モンゴルから日本へ

私はモンゴルで高校生活を送っていた頃から、建築を学びたいと考えていた。当時は、高校卒業後もモンゴルの大学へ進学し、そこで建築を学ぶものだと思っていた。しかし、新型コロナウイルスが世界中に広がっていた時期に、思いがけず日本へ留学する機会が訪れた。まさか高校生のうちに日本へ行き、そこで生活することになるとは、それまで考えてもいなかった。こうして私は、予定していた進路とは違う道を歩み始めることになった。日本に来た当初は、建築を学ぶことよりも、新しい環境で生活することに精一杯だった。高校では寮生活を送り、吹奏楽部にも所属していた。演奏会やコンクールなどでホールを訪れる機会はあったが、当時は建物の形や空間を意識することはほとんどなかった。演奏することや、音楽そのものに夢中だったからである。

「自分が学びたいもの」を探して

日本で大学へ進学することになったとき、改めて「自分は何を学びたいのだろう」と考えた。そこで思い浮かんだのが、以前から興味を持っていた建築である。せっかく日本で学ぶのであれば、

日本の建築についてもっと知りたいと思うようになった。日本は地震の多い国でありながら、長い歴史の中でさまざまな建築技術を発展させてきた。寺院や神社などの伝統建築から、近代以降の現代建築まで、多様な建物が街の中に残されている。異なる時代の建築が共存している日本の街並みに、私は魅力を感じた。建築を見ていく中で、私が特に興味を持ったのは、自然条件や限られた土地などの制約を、単なる問題として捉えるのではなく、設計の工夫によって魅力へと変えている点である。地震に対する安全性を考えながら快適な空間をつくることや、限られた敷地の中でデザイン性と暮らしやすさを両立させることに、日本の建築の奥深さを感じるようになった。特に印象に残っているのが、新潟市秋葉区文化会館である。大きく曲線を描く特徴的な外観や、屋上に広がる緑などを見たとき、一般的な文化会館とは違う面白さを感じた。建物だけを独立したものとして見るのではなく、周囲の環境まで含めて一つの空間として考えられているように感じたからである。

制約を魅力に変える、日本の建築

中でも私が特に魅力を感じているのは、限られた敷地の中でも、さまざまな工夫によって豊かな暮らしを実現している日本の住宅である。モンゴルで暮らしていた頃、私は比較的広い土地や、建物同士にゆとりのある環境を身近に感じていた。そのため、日本に来たばかりの頃は、隣の建物との距離が近く、道路に面した限られた敷地に住宅が建ち並んでいる光景がとても印象的だった。「このような小さな場所で、どのように快適に暮らすのだろう」と不思議に思ったことを覚えている。しかし、大学で建築を学び、住宅の設計について考えるようになると、その見方は少しずつ変わった。日本の住宅は、限られた面積を単に「狭い空間」として受け入れるのではなく、その条件を生かしながら暮らしの豊かさを生み出していることに気づいたからである。例えば、吹抜によって上下階をつなげることで、実際の面積以上の広がりを感じられるようにしたり、高い位置に窓を設けて室内の奥まで光を届けたり、中庭を設けて自然を身近に感じられるようにしたりする工夫がある。また、収納の位置や生活動線を細かく計画することで、限ら

れた空間を無駄なく使いながら、暮らしやすさも確保している。私はそこに、日本の住宅設計ならではの面白さを感じている。「狭いからできない」のではなく、「限られた条件だからこそ、何ができるのか」を考える。その発想に、日本の建築家や設計者の創造性を感じている。

狭小・変形敷地を生かすアトリエ・ワン

こうした日本の住宅の魅力を具体的に知るきっかけとなったのが、大学のゼミナールAで研究したアトリエ・ワンである。アトリエ・ワンは、狭小敷地や変形敷地など、一般的には制約になりやすい条件を生かし、その場所だからこそ生まれる空間をつくっている。私は、敷地の特徴を弱点として扱うのではなく、設計の魅力へと変えていく姿勢に惹かれた。ゼミでは、その中から『Sway House』を選び、研究した。実際の作品を調べるだけでなく、「自分ならどのように設計するか」という視点から考えることで、限られた敷地の中で空間をつくる難しさと面白さを学んだ。

建築から見えてきた、日本の暮らしと文化

建築を学ぶようになってから、私は建物の形やデザインだけでなく、その背景にある日本の暮らしや文化にも興味を持つようになった。日本の建築や文化には、自然との関わりを大切にする考え方が多く見られる。庭や参道、窓などを通して、建物と自然をゆるやかにつなげる空間もその一つである。春の桜、夏の緑、秋の紅葉、冬の雪など、季節の変化を身近に感じながら暮らすことも、日本の建築や文化の特徴だと思う。以前の私は、こうした場所を訪れても、単に「きれいな場所だ」と感じるだけだった。しかし建築を学んだ今では、建物だけでなく、周囲の自然や季節、そこに積み重ねられてきた文化まで含めて見るようになった。モンゴルから来た私にとって、日本の建築と文化との出会いはとても新鮮だった。建築は、人

が暮らすための器であるだけではない。その土地の歴史や文化、人々の暮らし方を映し出すものでもあるのだと感じている。また、日本の街を歩く中で、伝統的な建物だけでなく、現代の建築にも日本らしさが表れていることに気づいた。建築を見ることは、その土地の文化や人々の考え方を知ることにもつながるのだと思う。

いつか、モンゴルへ

コロナ禍をきっかけに始まった日本での生活は、私の進路だけでなく、建築に対する見方も大きく変えた。日本に来た当初は気に留めなかったり街の建物も、今では形や光の入り方、周囲との関係、そしてそこで営まれている暮らしまで考えながら見るようになった。日本で建築を学んだことで、これまで当たり前だと思っていたモンゴルの暮らしや建築についても、違った視点から考えられるようになった。モンゴルには、ゲルをはじめとする独自の伝統

的な暮らしや文化がある。日本とは気候や土地、生活様式が異なるため、日本の建築をそのままモンゴルに持っていくのではなく、日本で学んだ考え方をモンゴルの環境や文化に合わせて生かすことが大切だと思っている。これからも日本で多くの建築を見て、設計を学び、様々な経験を積んでいきたい。特に、限られた条件の中でも快適さやデザイン性を実現する工夫や、自然災害に対する安全性への考え方を学び、自分自身の設計にも取り入れていきたい。高校生の頃、思いがけず始まった日本での生活。その経験がきっかけとなり、私は今、建築を通して日本という国を見ている。この国で得た学びを自分の未来だけでなく、いつか自分の母国であるモンゴルの未来にもつなげていきたい。そして、モンゴルの文化や暮らしを大切にしながら、そこに暮らす人々が安心して快適に過ごせる建築をつくり、少しでも自分の国の発展に貢献できたらと思う。



新潟市民芸術文化会館「リゅうとびあ」高校時代、吹奏楽部の活動で訪れた際に撮影



新潟市秋葉区文化会館 曲線的な建物の形や、周囲の環境と一体となるような屋上の緑化に魅力を感じた建築



左／『Sway House』再設計作品・パース 右上／金櫻神社／山梨県甲府市 神社の建築だけでなく、周囲の自然や景観も含めて日本の文化を感じた場所 右下／モンゴルの伝統的な住居「ゲル」 自分のルーツであるモンゴルの伝統的な暮らしを象徴する住居